

部落問題文芸作品選集

第31卷

村上浪六著
いたづらもの(上)

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第三十一卷

定価は箱帯に表示

昭和五十一年六月十日発行

発行者 松本富夫

発行所 株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五丁152

電話〇三(七二六)六一五一(代表)
(七二三)九二四四

振替 東京 四―七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

いたづらもの

浪 六 著

前 編

其 一

もし簡潔と達意とを以て文章の極とすれば、一字一點の無意味ならざる電報用紙の文字は正に天下の名文なり、もし新聞紙上に空文徒辭ならざるものを求むれば、堂々たる論説よりも寧ろ職業案内の三行廣告に人事直接の利害多し、都下の紙聞紙中、最も有力なる五新聞を選びて、その人事欄の一節に左の三行

廣告を掲げしものあり、

未亡人年二十五財産整理上誠實懇切の相談人を
求む晝間三食を供し必要實費の外に月酬四十圓
本人來談○豊多摩郡淀橋町角筈一二三山村キタ

自己の五體を仇敵の如くコキ使うて稼げども貧乏神に追ひぬかるゝ生活難の今日、自己の人相が變るほど、目を剝いて走り歩けど箸一本も拾へぬ就職難の今日、この三行廣告は社會の競争激烈に呆れて口を開いたものゝため思はぬ不意に落ち來る棚の牡丹餅なり、

財産の整理上といへば整理すべき財産のある證據にして、素寒食の筈なく、殊更ら晝間の二字に夜の宿泊を許さぬ點は却ツて奥床しく、朝夕ともに三度お手

料理の御馳走を戴き、必要の實費以外に月々四十圓の報酬、これで勿體なや年が二十五の未亡人、たとひ不具者でも辛抱の出来るどころを、もし花の香まだ失せぬ十人並以上の美人ならばと、その日の新聞紙上に於ける國家の一大事よりも二號活字の殺人罪よりも、猶更ら目を皿にして見遁さぬ世の中、

いかに淺ましくともいかに馬鹿馬鹿しくとも今日これが或一部に實際の人情、親兄弟の病氣さへ尻が重くて容易に立上らぬ奴まで、本人來談の四字を見るや否、朝湯へ飛び込み理髪店へ駆け込み、中には俄の質受け、人だのみの借着にあらむかぎりの満艦飾を施して、さまゝの階級、いろゝの人間、いづれも淀橋の方面へ先登第一の勢ひ、色と慾とに我劣らじと押出したり押出したり、新宿行の電車は悉く満員満員、

生きた人間を荷物扱ひに詰め込まれて、一個の吊革に三四人も鈴生りの混亂雜踏、互に言はず語らず黙つて座の如く睨み合へばこそ無事なれど、もし一時に

今日の目的を打明せば色慾二道の亡者滿載、忽ち掴み合の大喧嘩なり、
時は用の多い冬の寒い冬枯の十二月、堀の内お祖師様の會式は過ぎたり、加之
も日曜でなく祭日でなく、梅には早し小金井の櫻は猶更ら大久保の躑躅は霜に
根を閉ぢらるゝ此時節を、今日に限りて新宿の終點へ俄の混雜、はゝ今朝の
新聞、あの一件で押寄せる客かと、忙しき車掌も運轉手も思はず相顧みて内々
の苦笑ひ、

それと知りて見れば見るほど、いよいよ以て呵しく面白し、いづれも懷手のま
ま美味いものを食うて仕事をせず樂に世を送りたいといふ蟲の善すぎた人間ば
かり、多くは當世流のハイカラ自慢にコスメチックと香水の匂ひ紛々たるのみ
か動もすれば薄化粧も仕兼ねまじき男、或は正體の得知れぬ風俗に天ぶらの金
鎖を捻くりながら妙に澄まし込んだ薄ッぺらな奴、乃至また財産の整理上とい
ふ點より八字髭の眼鏡越に三百的の法律臭い奴、中には五十の坂を越して半白

の仔細らしき腕を組みながら眞面目な顔した老爺あり、大道の土方としても立派に一人前の骨格を備へながら働かずに寝て居たいらしい面相の男、ちよいと氣が利いたやうで偕よく見れば何處やらに間のぬけた男、もし官吏ならば今日の缺勤届を出して來た不料簡の腰辨その月給は必ず四十圓以下なるべし、もし會社員ならば輕薄の猪口才子にして色男の内職とでも心得た奴なるべし、その他は一見いづれも所謂今日の墮落生と稱せらるゝ奴に相違なく、どの電車にも、どの電車にも、

一日一回が僅一圓か一圓五十錢にして加之も都下幾十社の中ただ五新聞に掲げし三行の廣告が、世間あらゆる階級の亡者どもを吸集して新宿の終點に吐き出さるゝ雑踏、互に見合はす顔と顔の恥かしくもなく斯の如し、つまりは女と金のため、

いかに廣き東京も、これほど一時に電車より吐き出さるゝ人間、ぞろ／＼と新宿の終點より鐵道の踏切を越えて、淀橋の方面へ落ち込み落ち合ふ中には、見す知らずの他人ばかりでなく、はつと驚いて脇道へ首尾よく遁げ去る奴もあれど馴れぬ道路に狼狽へて遁げ損ひし奴と奴との鉢合せ、今更ら雙方より退くに退かれぬ立往生と立往生、互に妙な面しながらも其まゝの無言では猶更ら妙な工合に口より出まかせ、

「やア君、どこへ」

「僕よりも君は全體、どこへ行くんだ、寢坊のくせに、この朝ツばらから」

「なアに、ちよいとね、四谷の大木戸まで用があつて來たんだが、どういふもんか今朝の電車ア馬鹿に混合ツてさ、おまけに運わるく中央でプランコと來たから出るには出られず、つい終點まで運ばれて仕舞ツた、はゝゝゝ」

「そいつア困つたね、やはり僕も同じ目に逢ツて來たが、時に君、巢鴨は、

これから、どの道を、どう行けば可い」

「巢鴨、とんでもない巢鴨は君、大變な方角違ひだよ」

「いや、巢鴨でなかつた、大塚でもない原、原宿の代々木だ、代々木だ」

「原宿の代々木は呵しい、原宿と代々木も違つてゐるが、まア續いてるとして
たしか此の、踏切を越えて左の方へ行くんだけ、右の方へ行けば淀橋か柏
木になるからねエ、僕は柏木に用がある、これで失敬するよ」

「ちよ、ちよいと待つた君、今、君は大木戸に用があつて來たといふちやア
ないか」

「何、どうせ通り越したから大木戸の用は歸途にするよ、幸ひ柏木に久しく
逢はない友達が居るからね、こんな時に訪ねてやろうと思つてさ」

「ちやア君これで別れよう、代々木は此方だね、君の大木戸と違つて歸途に
用の足せないところだから困るよ」

一方は彼奴あゝ吐せど、もしや我背後を躡けて來るかと振返り、一方は彼奴の影さへ見えぬやうになればと振返り、互に思はず雙方より振返るや否、はツと再び面くらひの體、

「やア失敬」

「やア失敬」

いづれ同じ心で同じ道へ押寄せる奴、平生の類を以て友とするものに此失敬連中なか／＼尠からず、甚だしきは品川と淺草へ別れて出た筈の親子が不意の對面に驚き、互に拔駈けの兄弟ここに落ち合うて無言の目と目を白黒にする奴あり、まさか彼人かと思はるゝ案外の醜態、わざと拵へても出來ぬ自然の滑稽、みぐるしき露見の失敗、ごまかせぬ眼前の不面目、これで此中に國家の干城たるべき豫備後備さては現役に近き壯丁あるかと思へば、いかにも心細し、但し色と慾どに押が強くて太い野郎共と思へば、猶更ら情なし、

淀橋の角筈百二十三番地の山村きた、これが先登第一を争ふ今日の目的物、その百二十三番地に最も近くして幸ひの目當となるべき百二十番地は味噌醬油を片手の小賣酒屋、店頭の中小僧おもはず眉を顰めて主人の老爺を振返りぬ、

「旦那、今日は何です、ぞろ／＼と續いて不思議に人が出ますな」

「さア何だらう、乃公も今朝から變に思ツてるよ」

「出るばかりぢやアありません、よく見ると同じ人間が幾度となく此前を往ツたり來たりしてさ、おまけに薄氣味わるく妙な面で、じろ／＼自店の表札を覗き込みますぜ」

「はてね」

「あゝあれ、旦那あれだ、あの向う側を澄まして通る金縁眼鏡の嫌に色の生

白い瘦ッこけた人と、その後から八字髭を生した洋服の赤靴で、ひよろく背の高いハイカラね、あの二人は七八度も旦那、うろついてますよ、まさか今日は精神病院の遠足ぢやアありますまいな」

「馬鹿ア言へ、精神病院の遠足會を追ッ放しにやられて堪るもんか、うか

く喰はした奴が災難だ、はゝゝゝしかし變だな、おかしいね」

酒屋の老爺、首を捻りながら、忙しくて読み後れし今朝の新聞を取上げ、何心なく見る例の三行廣告に、思はず膝を叩いて我を忘れし獨言、

「はゝア、や、こいつア驚いた、こりやア驚いた、これだな、これで分つた

どこの何者が知らないが、惡戯も此處まで念入に資金をかけて工合するた

ア、あまり洒落れ過ぎて酷い奴もあるもんだ」

折しも近所に心易い荒物屋の主人、此奴また親の敵でも見付け出したやうに慌て、新聞片手のまゝ飛び込み來りぬ、

「みゝ見ましたかい、はッはッはッ」

「見た見た、今氣が付いて驚きましたよ」

「驚きますなア、かういふ凄惨な術で罪の深い悪戯をする奴があるんですから
なア、これほどの悪戯する奴ですから、どツかの影で笑ひながら見物して
るかも知れませんぜ」

「全くさ、しかし面白い世の中だ、どうです、この人出は、随分、いろんな
人間が交つて居ますぜ、昔から相變らず恐ろしいものア色と慾とですなア
お互に十二年も若くて此處に住んで居なきやア、やはり御多分に漏れ
ず、この同勢に加はりますかね、はゝゝゝ」

「まさか、はッはッはッ」

「ところで、これほど探しあぐんでる大勢の人間が言ひ合はしたやうに、一
人として百二十三番地の山村キタといふ名前を露骨に聞くものゝないといこ

ろが、おかしい人情だ、來た事は來なが流石に何となく、きまりの悪いも
ンと見えますなア、つまり百番地ぐらいから、段々に探し當てようとする
心根が、いぢらしくてお氣の毒千萬だ、はゝゝゝ」

「どうでせう、面白い面白いが、考へて見ると實ア、かはいさうだ、いつ
そ人助けに今のうち店頭へ張紙でも仕てやツちやア、それには幸ひ、こゝ
の百二十番地が落ち合ッて來る關所に當りますぜ」

「どんだ關所に當つたもんだ、しかし功德になりますなア、よろしい、書い
て張出ませう、よもや後で警察から叱言を食ふ事もあるまい」

百二十番地の酒屋の店頭、まがり角の軒下より半紙三枚繼ぎ合はして思ひ切ッ
た老爺の惡筆、ベツたりと縦に十六字、

百二十三番地は家のない空地面に候

遠路わざわざ大切の用を缺いで、この寒空に我劣らじと押寄せし亡者ども、あ

ツと呆れて怒るに怒れず泣くに泣かれず、今更ら不足を持ち込む喧嘩敵手もなく、さりとて人には言はれぬ自業自得、まんと首尾よく一ぱい喰はされた馬鹿な面を曝しながら、流石に元の新宿終點へ逆戻りの電車満員を恥の上塗りと思ひしか、多くは其まゝ心にもない方角へ迂回して、ちりくばらく、

其 二

職業案内の三行廣告を擔任せる五新聞の社員、例の淀橋一件より三日目の後夕飯かたぐ相會して談話的の評議、

「随分と人を馬鹿にして悪い洒落をする奴もあつたもんだね、どうせ賣物と買物の相違だから無論、三行廣告は求むる方にも應ずる方にも必ず多少の掛引ある事は承知してるが、まさか君、あれほどの人間を草の生えた空

地へ引ッ張り込ンで一ぱい食はすたア、誰れしも思はないせ、はゝゝゝ」
「なアに惡洒落は惡洒落だが、我々の方へは正當の代價を拂ッて掲載すべき手續きに不都合のない以上、わざゝこの寒いに新宿の果まで欺されて出掛ける奴が自分の勝手に馬鹿を見たのさ、三度の飯を食ッて財産整理の雜費以外に月々四十圓づゝの報酬を貰ッて、異によれば腕次第で今年二十五の女主人が君、ごうにかならうといふ、そんなウマい事が今日の世の中にあるもんかね、しかし外に相談する人も頼りにする親類もないらしく見せて、未亡人としたところは考へたね、あれで二八の處女ど來りやア最初からの嘘になッて仕舞ッて、いくら馬鹿でも淀橋くんだりまで、わざゝ恥を曝しに行く奴アないよ、はゝゝゝ」
「だが、寧ろ痛快だ、起きて居て働かずに年中そんな夢ばかり見てる奴のため、實に頂門の一針だ、中には親の意見よりも、ぎやふんとまゐつた奴が